

利尻・礼文両島におけるトゲバナネイソネジレオバエの分布

佐藤雅彦

〒 097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町 利尻町立博物館

New Distributional Records of an Endemic Fly, *Thalassophorus spinipennis*, at Rishiri and Rebun Islands, Northern Hokkaido

Masahiko SATO

Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

Abstract. *Thalassophorus spinipennis*, an endemic fly of Rishiri Island, is newly recorded from Rebun Island. Although its distribution on Rishiri Island was previously known only from a coastal area at Os- hidomari, which is the type locality, it is newly recorded from 11 coastal areas on Rishiri Island, except for the northwest. The reasons for its absence in northwestern Rishiri Island are unclear, but may be due to substrate preferences, as most of the northwestern coastal areas are covered by a localized lava flow, known as the Kutsugata Lava Flow.

トゲバナネイソネジレオバエ *Thalassophorus spinipennis* は、1986年に三枝豊平博士によってオドリバエ科の新属新種として記載された体長 2-3mm ほどの双翅目である (Saigusa, 1986, Fig. 1)。海岸の岩場などに棲息し、基準産地は利尻島 鷺泊ベシ岬であり、これまで本種の分布記録は同地以外からは知られておらず、利尻島固有種の一つとされてきた。新属新種の発表以降も同属の種は長らく発見されなかったが、2番目の種が2011年にカナダと北米から新種発表された (Brooks & Cumming, 2011)。利尻島固有種であるにも拘わらず、その分布や生態などはこれまでほとんど調査されていなかったため、筆者は2008年と2012年に利尻礼文両島においてトゲバナネイソネジレオバエの分布状況を再確認する調査を実施した。その結果、利尻島内で11か所、そして初めて礼文島においても2か所から本種の棲息を確認したので、ここに報告する。なお、本種の採集には H. Ulrich 博士 (Grafschaft) の現地での1992年の調査が大変参



Figure 1. *Thalassophorus spinipennis*.

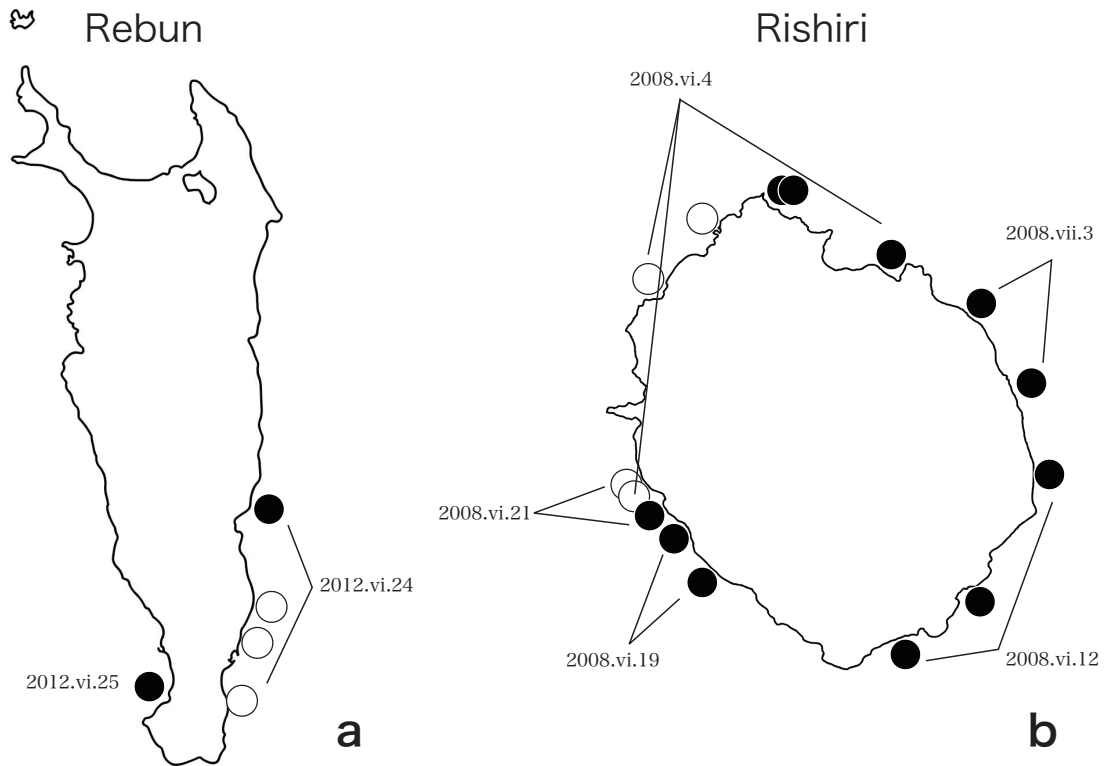


Figure 2. Distribution maps of *T. spinipennis* on Rebun and Rishiri Islands. a: Rebun Island, b: Rishiri Island. The solid circle shows the known distribution of *T. spinipennis* and the open circle shows the unconfirmed distribution. The date indicates the day of the survey.



Figure 3. Collection sites of *T. spinipennis* (a) at Ishizaki, Rishiri Island, (b) at Minamihama, Rishiri Is., (c) at Asahihama, Rishiri Is., and (d) at Motochi, Rebun Island.

考になったほか、礼文島の調査では宮本誠一郎氏(レブンクル自然館)に様々な便宜をはかっていただいた。また、和名については本種の記載をされた三枝豊平博士(三枝昆虫研究所)にご教示いただいた。これらの方々には心より感謝の意を表したい。

調査方法

現地調査は利尻島については2008年5月～7月、礼文島については2012年の6月に実施した。調査場所は図2で示した利尻島16か所、礼文島5か所、計21か所の海岸で実施され、本種の確認のために同一場所で10分間、目視によって本種を探すほか、目視ができなかった場合は付近で捕虫網(直径35cm)によるスウィーピングを行い、捕獲された昆虫類に本種が含まれていないかを確認した。確認がされた場合は証拠標本として各調査場所において少数のサンプルを捕獲し、調査後、実体顕微鏡にて外部形態の確認を再度行った。

結果と考察

利尻島内では11か所(図2b)、礼文島からは2か所(図2a)において本種が確認された。なお利尻島以外からの本種の確認はこれが初めての記録となった。確認された多くの場所は人為的な影響が少ない自然海岸であるが(図3a, 3b)、一部、テトラポットなどが置かれているような人為的な改変があったと想像されるような海岸(図3c, 3d)でもその生息が確認された。生息が確認された場所に共通する環境としては、波打ち際が玉石によって構成されていることや、比較的大きな礫などが点在する点である。その一方、利尻島北西部では一様に本種を確認することができなかった。これらの海岸はおおよそ2.7万年前に山腹などから流れた杓形溶岩流によって広く覆われた場所であり(植木・近藤, 2008)、礫や玉石などが少なく岩礁地帯が続くことが多い。このような海岸環境の変化が本種の分布をこれらの海岸部で阻んでいる可能性もあるが、今後、更にこれらの海岸で丹念に本種の探索をする必要もある。

本種は波打ち際付近から1～2mの間の場所で発

見されており、大きな礫の基部と玉石から構成される地面の隙間などの日陰部分から見つかるほか、特にその姿を確認しやすかったのは、大きな礫の垂直面上からであった。直射日光下にも出てくることがあり、その場合は赤い複眼が肉眼でもよく目立ち、他の海浜性双翅目類などからのよい識別点となった。観察された多くの個体は礫の面を点々と何かを探るように比較的早めの速度で断続的に歩く行動をしていたが、捕食や交尾に関すると思われる行動は確認されなかった。また、吸水管などを近づけると敏感に反応して飛翔し、すぐに礫の間などに移動することも多かった。

本調査およびこれまでの利尻町立博物館所蔵標本では、5月28日～7月3日に成虫が確認されており、三枝博士が記載に使用した標本は1967年7月2～3日に駕泊で採集されたものだった。雌雄ともに5月下旬から出現するが、成虫の発生時期については7月中旬以降の調査がされていないため、今後の課題である。

本種はこれまで利尻固有種とされていたが、本調査によって礼文島における分布も初めて確認された。海岸部の小さなハエであり、これまであまり調査も行われず見過ごされてきたためと想像される。利尻島においても本種の存在についてはほとんど知られておらず、リシリヒナゲシに代表されるような陸上維管束植物の同様の固有種と比較すると、その保全や関心の度合いは非常に低く、漁業や自然災害対策として自然海岸が消えていく中、本種の保全などについてはなにも対策が打たれてこなかったのが現状である。本調査によって利尻島固有種の希少性は失われたものの、本種の生息域がこれまで以上に広いことが明らかになったことは、同種の保全対策の選択肢がさらに広がることにもつながるはずである。今後は北海道本土における分布調査を行うことで、新たな生息地の発見や同属の別種の探索などを進めていくことも必要であろう。

参考文献

Brooks, S. E. & J. M. Cumming, 2011. The New World genera of Parathalassinae (Diptera: Em-

pidoidea: Dolichopodidae s.l.), with new species of *Thalassophorus* and *Eothalassius*. *Can. Entomol.*, 143(5): 423-446.

平嶋義宏・森本 桂 (監修), 2008. 新訂原色昆虫大圖鑑 第三卷. 北隆館. 848pp. 東京.

Saigusa, T., 1986. New genera of Empididae (Dip-

tera) from eastern Asia. *Sieboldia*, 5: 97-118.

植木岳雪・近藤玲介, 2008. 利尻火山, 杓形溶岩流の噴出年代: 溶岩直下の腐植質シルト層に含まれる炭化木片の AMS ^{14}C 年代に基づいて. 第四紀研究, 47(5): 349-353.